

アイルランド英語諸方言における R 音化母音の分布特徴 *

三浦 弘[†]・勝田 浩令^{††}

【要旨】本研究はアイルランド英語諸方言における R 音化母音の特徴を音響的に分析し、考察したものである。各方言における R 音化母音の分布状況を明らかにするために、母音 + /r/ における F3 の推移を詳しく分析した。地域方言によって R 音化母音の分布に相違が見られ、NURSE 母音と START 母音という中舌寄りの母音が他の母音と比べて R 音化し易いことがわかった。

キーワード：アイルランド英語、R 音化母音、第 3 フォルマント

1. はじめに

アイルランド英語諸方言は、音節末の /r/ を発音する R 音性 (rhotic) 方言として知られている (Wells 1982, Hickey 2012)。しかし、その音声実現は地理や社会階級などの様々な要素と結びついて変異することがわかっている。地理的な /r/ の音声変異として、北アイルランドで話される英語方言ではそり舌の発音が、アイルランド共和国で話される英語方言では軟口蓋化した発音がなされることが指摘されている (Hickey 1989, 2004, 2012)。また、ダブリン方言を対象とした社会音声学的な研究 (Hickey 1999) では、/r/ の有無と社会階級との結びつきが明らかになっている。下層方言の話者は音節末の /r/ を脱落させるか弱く発音する傾向があり、中層階級の話者は /r/ を保持し、そり舌音で実現する傾向がある。この点において、ダブリン方言はニューヨーク方言 (Labov 1966) と類似している。

また、/r/ 音そのものの音声的特徴ではなく、音節末の /r/ の有無が直前の母音音価に与える影響についても指摘がなされている。Hickey (1989) は音節末の /r/ が母音の異音相違を引き起こしていると述べている。例えば、/r/ の前の母音は後舌化 (retraction) する傾向があるため、*last* [la:st] と *barn* [ba:ɹn] の母音はアイルランド英語では母音音価が異なる。また、母音が少し広くなることもあり、*pay* [pe:] と *pear* [pe:ɹ] のような音声実現の違いを生み出している。

しかしながら、アイルランド英語諸方言の先行研究では、/r/ が先行母音と融合する R 音化 (例えば [ɑɹ] が [ɑ] になるように、母音が /r/ の音色を伴うこと) については言及されておらず、R 音化と母音音価の関係や方言差などの詳細については明らかになっていない。本稿では、アイルランド英語諸方言において、各母音の /r/ との融合状況を音響的に分析し、それぞれの方言において、R 音化母音の分布状況を明らかにする。

*本研究は JSPS 科研費 JP23520593、JP26370574、JP17K02821 の助成を受けたものである。また、ダブリン大学トリニティ・カレッジ (TCD) 経営戦略研究センター長のルーイ・ブレナン (Louis Brennan) 教授 (兼専修大学客員教授) には、TCD での被験者募集と録音施設のご提供に関してご協力いただいた。

[†]専修大学文学部

^{††}カリフォルニア大学ロサンゼルス校言語学科・博士課程

2. 方法

2.1 録音

本研究のための現地収録は、2015 (平成 27) 年 8 月に、ダブリン大学トリニティ・カレッジ、ビジネス学部小会議室 (8 月 25 日 (火))、及びケリー州キラニー市内、中心街入口の公園ベンチと住民宅 (8 月 30 日 (日)) にて行った。

被験者に語彙リストを提示して、各語をキャリアセンテンス (Say _____, please.) に入れて、2 回ずつ音読してもらった。収録には、ポータブルレコーダー (主: Roland R-26、副: TASCAM DR-08) とプラグイン・マイクロフォン (主のみ: SONY ECM-MS957、周波数特性 50~18,000 Hz) を使用した。サンプリング周波数は 44.1 kHz、量子化は 16-bit に設定した。

2.2 被験者

以下 (1) と (2) に被験者の年齢 (数字) と出身地を収録地点ごとに示す。被験者記号の W は女性 (Woman)、M は男性 (Man) の略号である。

(1) ダブリン大学トリニティ・カレッジ

| | | |
|----|----|-----------|
| W1 | 38 | ダブリン |
| W2 | 58 | ダブリン |
| W3 | 37 | ティローン |
| M1 | 58 | メイヨー |
| M2 | 60 | コーク |
| M3 | 57 | ウォーターフォード |

(2) キラーニー市内

| | | |
|----|----|------|
| M4 | 48 | キラニー |
| M5 | 66 | キラニー |
| M6 | 35 | キラニー |
| W4 | 35 | キラニー |

2.3 分析方法

R 音性は第 3 フォルマント (F3) の周波数を下げることが知られている (Ashby 2011: 147, Thomas 2011: 131)。本研究では、Praat Ver. 6.0.21 (Boersma and Weenink 2015) を使用して、母音 + /r/ の持続時間中における F3 の推移を調査した。まず、母音と /r/ を含む持続時間中の 20% 時点における F3 の値を計測した。20% 時点を選んだ理由は、直前の子音の影響を避けて、母音または (母音と /r/ が融合している場合は) R 音化母音の F3 を計測するためである。母音と /r/ が融合している場合は、そうでない場合と比べて、20% 時点の F3 の値が低くなる。続いて、20% 時点以降に F3 の値が下降している場合は最も低い時点の F3 の値を、上昇している場合は最も高い時点の F3 の値を計測した。母音と /r/ が融合している場合は、20% 時点の F3 の値が低く、その後 F3 の値が低いまま推移するか、上昇することが期待される。一方で、母音と /r/ が融合していない場合は、20% 時点の F3 の値が高く、その後 F3 の値が下降することが期待される。分析に使用した語彙は 23 語で、/r/ の前の母音は様々である。これらの語彙は、Wells (1982)

の「標準語彙セット」(standard lexical sets) に従って 1、表 1 の 7 語群に分類できる。以下に示す図は、見易さを考慮して、NURSE 語群とその他の語群 (NEAR 語群、SQUARE 語群、START 語群、NORTH 語群、FORCE 語群、CURE 語群) という分類で表示する。

表 1：調査語彙

| NURSE 語群 | NEAR 語群 | SQUARE 語群 | START 語群 | NORTH 語群 | FORCE 語群 | CURE 語群 |
|---------------|-------------|---------------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| <i>firm</i> | <i>near</i> | <i>square</i> | <i>start</i> | <i>north</i> | <i>force</i> | <i>cure</i> |
| <i>German</i> | <i>beer</i> | <i>air</i> | <i>park</i> | | <i>board</i> | <i>pure</i> |
| <i>work</i> | | | <i>bard</i> | | <i>more</i> | |
| <i>third</i> | | | <i>cart</i> | | | |
| <i>bird</i> | | | | | | |
| <i>nurse</i> | | | | | | |
| <i>girl</i> | | | | | | |
| <i>birth</i> | | | | | | |
| <i>berth</i> | | | | | | |

3. 結果と考察

3.1 ダブリン方言

図 1 と図 2 はダブリン方言話者 W1 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。それぞれの語について、母音 + /r/ の 20% 時点の F3 の値と、その後 F3 が上昇しているものは最大値 (max) を、下降しているものは最小値 (min) を示している。

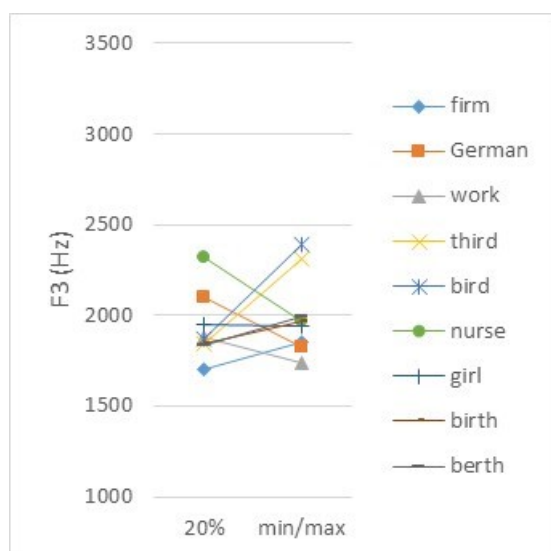


図 1：NURSE 語群の F3 の推移 (W1)

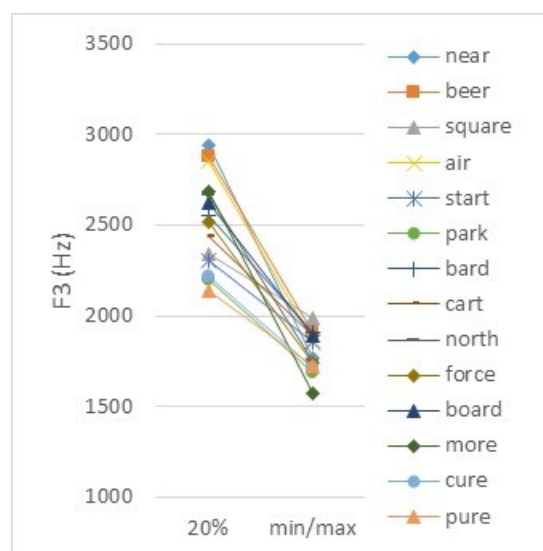


図 2：その他の語群の F3 の推移 (W1)

図 1 を見ると、NURSE 語群の語の中には、F3 の値が上昇している語と、下降している語の両方があることがわかる。前者の語は、*firm* (1705Hz から 1852Hz)、*third* (1846Hz から 2315Hz)、*bird* (1870Hz から 2390Hz)、*birth* (1847Hz から 1963Hz)、*berth* (1835Hz から 1993Hz) の 5 語であり、後者の語は、*German* (2100Hz から 1825Hz)、*work* (1878Hz から 1739Hz)、*nurse* (2321Hz

¹ 標準語彙セットとは、Wells (1982: xviii-xix)によって導入され、その後、英語音声学研究の標準となった語彙セットである。英米の標準語をもとに 24 語群が設定され、該当する代表語をもって語群の名称とする。

から 1967Hz)、*girl* (1947Hz から 1940Hz) の 4 語である。一方で、図 2 を見ると、その他の語群の語はすべて、20%時点の F3 の値がその後下降していることがわかる。すべての語において、20%時点の F3 の値は 2000Hz 以上であり、その後、2000Hz 以下に下降している。図 1 と図 2 から、W1 の発音は、NURSE 語群とその他の語群で異なっていることがわかる。NURSE 語群の語の中には、*firm*、*third*、*bird*、*birth*、*berth* のように、20%時点の F3 の値が相対的に低く、母音と /r/ が融合していると判断できるものがあるが、その他の語群では、すべての語において、母音と /r/ が融合しておらず、母音と /r/ がそれぞれ発音されている。

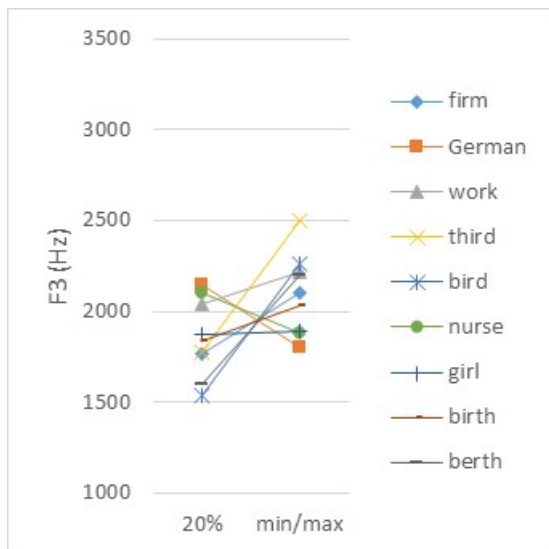


図 3 : NURSE 語群の F3 の推移 (W2)

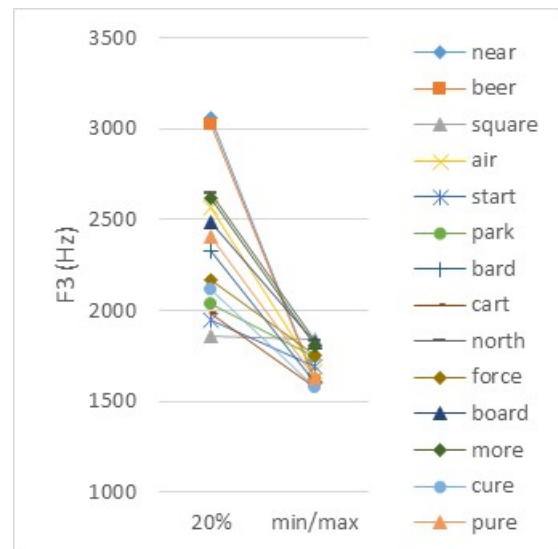


図 4 : その他の語群の F3 の推移 (W2)

図 3 と図 4 はダブリン方言話者 W2 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。図 3 を見ると、図 1 と同様で、F3 の値が上昇している語と、下降している語の両方があることがわかる。前者の語は、*firm* (1768Hz から 2103Hz)、*work* (2041Hz から 2218Hz)、*third* (1778Hz から 2496Hz)、*bird* (1536Hz から 2259Hz)、*girl* (1875Hz から 1890Hz)、*birth* (1834Hz から 2029Hz)、*berth* (1596Hz から 2203Hz) の 7 語であり、後者の語は、*German* (2142Hz から 1803Hz) と *nurse* (2130Hz から 1879Hz) の 2 語である。一方で、図 4 を見ると、すべての語において、F3 の値が下降している。ただし、*square* (1855Hz から 1841Hz) は F3 の値にほとんど変化が見られず、その他の語群の中では例外的な発音になっている。全体的な傾向は W1 (図 1 と図 2) と同様で、NURSE 語群の多くの語 (*firm*、*work*、*third*、*bird*、*girl*、*birth*、*berth*) において、母音と /r/ が融合しているが、その他の語群の語は、母音と /r/ がそれぞれ発音されている。

図 1～図 4 から、ダブリン方言において、NURSE 語群の語とその他の語群の語の発音には、F3 の推移に違いあることがわかった。NURSE 語群の語の中には、20%時点の F3 の値が低く、その後上昇するものがあるが、その他の語群では、すべての語において、20%時点の F3 の値が高く、その後下降していた。つまり、ダブリン方言の NURSE 語群の中には、母音と /r/ が融合して R 音化母音が発音されているものがあるが、その他の語群では母音と /r/ は融合しておらず、母音と /r/ がそれぞれ発音されている。

図 5 と図 6 は NURSE 語群の *firm* と START 語群の *bard* のスペクトログラムである。どちらも W1 によって発音されたものであり、周波数の範囲は 0～5000Hz に設定されている。*firm* の F3

は母音の始まりからすでに低く、第2フォルマント (F2) に近いが、*bard* の F3 は母音 + /r/ の 50% 付近までは高く、その後下降している。

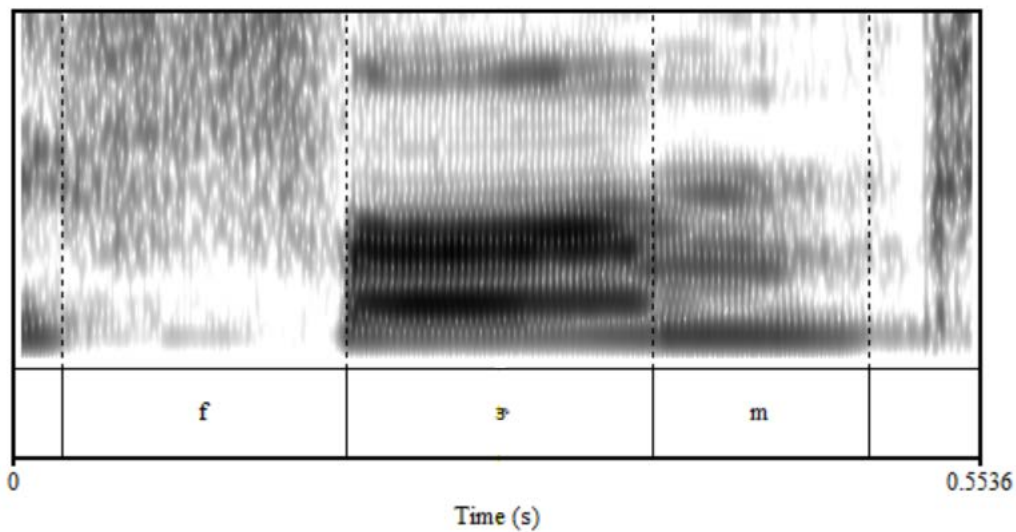


図 5 : *firm* (NURSE 語群) のスペクトログラム (W1)

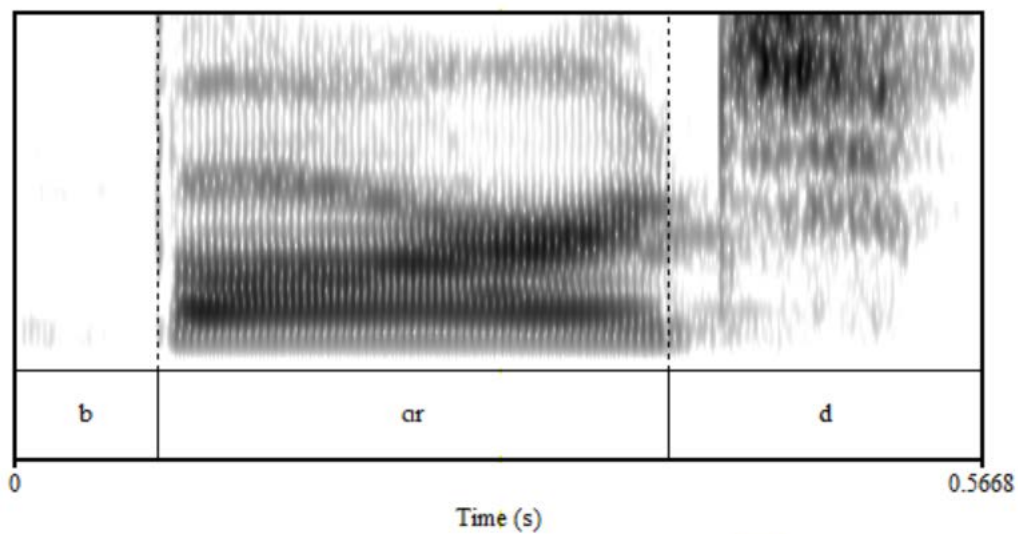


図 6 : *bard* (START 語群) のスペクトラム (W1)

3.2 キラーニー方言

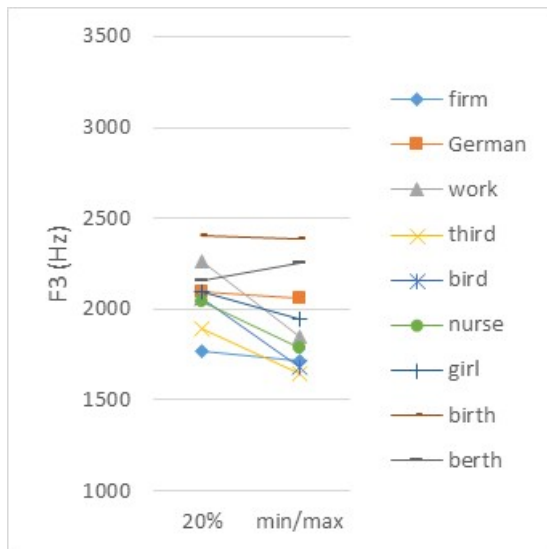


図 7：NURSE 語群の F3 の推移 (M4)

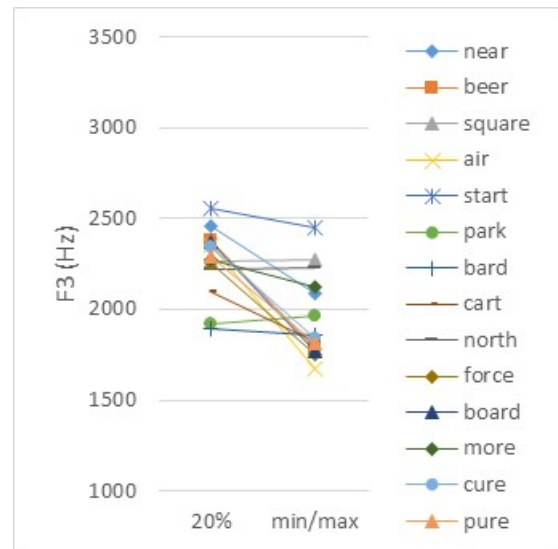


図 8：その他の語群の F3 の推移 (M4)

図 7 と図 8 は、キラーニー方言話者 M4 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。どちらの図においても、F3 の値が下降している語が多く見られるが、F3 の値が僅かに上昇している語もある。NURSE 語群 (図 7) において、F3 の値が上昇している語は *berth* (2156Hz から 2256Hz) のみであり、その他の 8 語は F3 の値が下降している。その他の語群において、F3 の値が上昇している語は *square* (2260Hz から 2270Hz)、*park* (1921Hz から 1965Hz)、*north* (2224Hz から 2233Hz) の 3 語のみであり、その他の 11 語は F3 の値が下降している。ただし、NURSE 語群の *birth* (2404Hz から 2388Hz) とその他の語群の *start* (2559Hz から 2451Hz) のように、下降後の F3 の最小値 (*birth*: 2388Hz、*start*: 2451Hz) が、F3 の値が上昇している語の最大値 (*square*: 2270Hz、*park*: 1965Hz、*north*: 2233Hz) よりも高くなっている語もある。

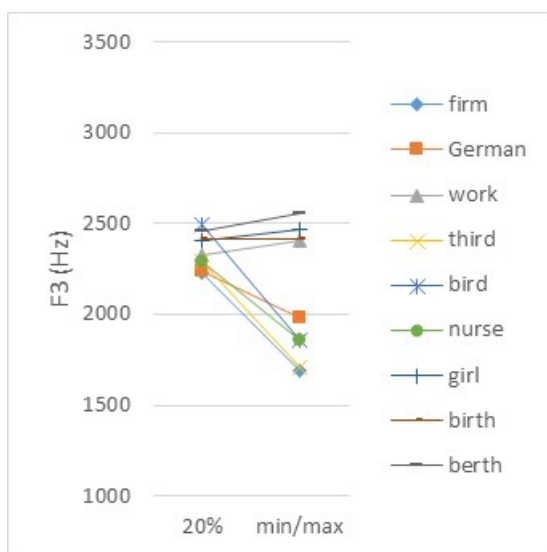


図 9：NURSE 語群の F3 の推移 (M5)

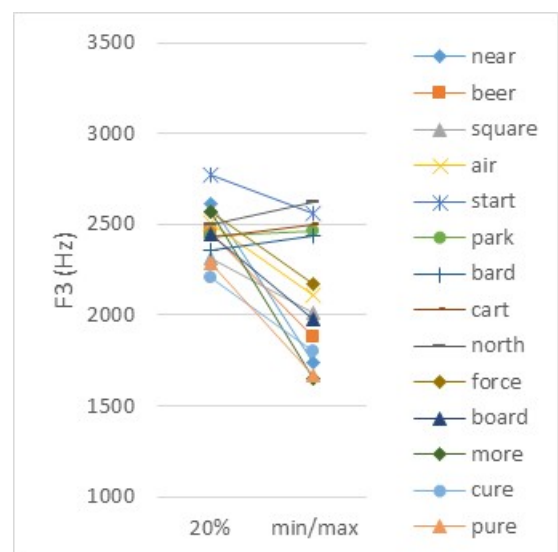


図 10：その他の語群の F3 の推移 (M5)

図 9 と図 10 は、キラーニー方言話者 M5 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。M4 (図 7 と図 8) と同様で、どちらの図においても、F3 の値が上昇している語と下降している語があることがわかる。NURSE 語群 (図 7) の語において、F3 の値が上昇している語は *work* (2328Hz から 2421Hz)、*girl* (2404Hz から 2467Hz)、*berth* (2458Hz から 2560Hz) の 3 語であり、それ以外の 6 語は F3 の値が下降している。その他の語群の語において、F3 の値が上昇している語は *park* (2436Hz から 2464Hz)、*bard* (2356Hz から 2439Hz)、*cart* (2426Hz から 2499Hz)、*north* (2501Hz から 2623Hz) の 4 語であり、それ以外の 10 語は F3 の値が下降している。ただし、NURSE 語群の *birth* (2418Hz から 2412Hz) とその他の語群の *start* (2772Hz から 2561Hz) は、下降後の F3 の最小値 (2561Hz と 2412Hz) が、F3 の値が上昇している語の最大値 (*park*: 2464Hz、*bard*: 2439Hz、*cart*: 2499Hz、*north*: 2623Hz) と同様の高い数値になっている。

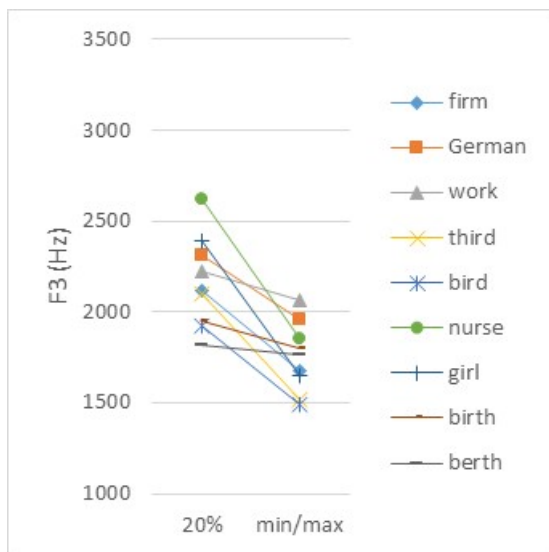


図 11 : NURSE 語群の F3 の推移 (M6)

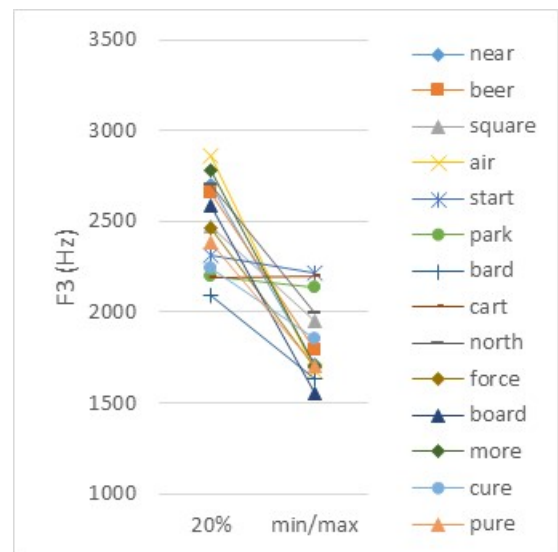


図 12 : その他の語群の F3 の推移 (M6)

図 11 と図 12 は、キラーニー方言話者 M6 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。NURSE 語群 (図 11) においては、すべての語の F3 の値が下降しており、その他の語群 (図 12) においても、*cart* (2193Hz から 2200Hz) 以外のすべての語の F3 の値が下降している。しかし、その他の語群の *start* (2312Hz から 2220Hz) と *park* (2196Hz から 2139Hz) は F3 の下降後の最小値 (*start*: 2220Hz、*park*: 2139Hz) が、F3 の値が上昇している *cart* の最大値 (2200Hz) と同様の高い数値になっている。

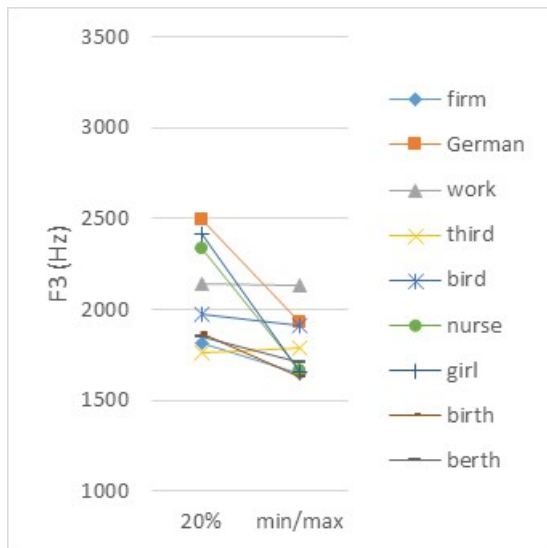


図 13 : NURSE 語群の F3 の推移 (W4)

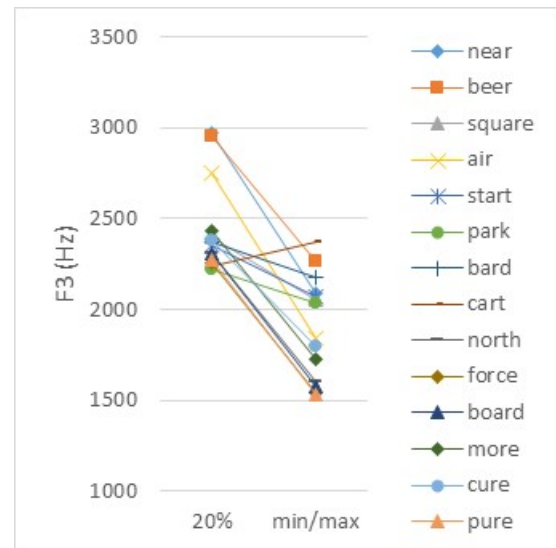


図 14 : その他の語群の F3 の推移 (W4)

図 13 と図 14 は、キラーニー方言話者 W4 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。NURSE 語群 (図 11) において、F3 の値が上昇しているものは *third* (1758Hz から 1788Hz) のみであり、その他の語は F3 の値が下降している。また、その他の語群 (図 12) の中で、F3 の値が上昇しているものは *cart* (2236Hz から 2373Hz) のみで、その他の語は F3 の値が下降している。

図 7~図 14 から、キラーニー方言では、F3 の値が下降する語と上昇する語が語群に係わらず見られることがわかった。F3 の値が下降する語の多くは、ダブリン方言のその他の語群 (図 2 と図 4) の語と同様で、母音と /r/ が融合しておらず、母音と /r/ がそれぞれ発音されていると考えられる。一方で、F3 の値が上昇する語に関しては、ダブリン方言の NURSE 語群 (図 1 と図 3) の語とは推移の様子が異なっている。

表 2 と表 3 は、ダブリン方言とキラーニー方言のそれぞれにおいて、F3 の値が上昇する語の「20%の F3 の値」、「F3 の最大値」、そして「最大値から 20%の値を引いた値」を示している。表 2 からわかるように、ダブリン方言においては、F3 の値が上昇する語の 20%の値は *work* (2041Hz) を除いたすべての語で 2000Hz 以下になっている。一方で、表 3 を見ると、キラーニー方言話者の 20%の F3 の値は、M4 の *park* (1921Hz) と W4 の *third* (1758Hz) を除いてすべて 2000Hz 以上になっている。これは、女性のフォルマント周波数が男性のものよりも高くなる傾向にあることを考慮すると、実際の数値を比較する以上の違いである。本研究のダブリン方言の被験者は 2 人とも女性で、キラーニー方言の被験者は 4 人中 3 人が男性であるため、同じ条件下であれば、ダブリン方言話者の F3 の数値の方がキラーニー方言の男性話者の数値よりも高くなることを期待される。しかし、反対にダブリン方言話者の F3 の数値の方が低いということは、2つの方言間に明らかな発音上の違いがあることを示している。

表 2 : ダブリン方言話者の発話で F3 の値が上昇していた語
F3 の 20% の値、最大値、最大値 - 20% の値。

| | | 20% (Hz) | 最大値 (Hz) | 最大値 - 20% (Hz) |
|----|--------------|----------|----------|----------------|
| W1 | <i>firm</i> | 1705 | 1852 | 147 |
| | <i>third</i> | 1846 | 2315 | 469 |
| | <i>bird</i> | 1870 | 2390 | 520 |
| | <i>birth</i> | 1847 | 1963 | 116 |
| | <i>berth</i> | 1835 | 1993 | 158 |
| W2 | <i>firm</i> | 1768 | 2103 | 335 |
| | <i>work</i> | 2041 | 2218 | 177 |
| | <i>third</i> | 1778 | 2496 | 718 |
| | <i>bird</i> | 1536 | 2259 | 723 |
| | <i>girl</i> | 1875 | 1890 | 15 |
| | <i>birth</i> | 1834 | 2029 | 195 |
| | <i>berth</i> | 1596 | 2203 | 607 |

表 3 : キラーニー方言話者の発話で F3 の値が上昇していた語
F3 の 20% の値、最大値、最大値 - 20% の値。

| | | 20% (Hz) | 最大値 (Hz) | 最大値 - 20% (Hz) |
|----|---------------|----------|----------|----------------|
| M4 | <i>berth</i> | 2156 | 2256 | 100 |
| | <i>square</i> | 2260 | 2270 | 10 |
| | <i>park</i> | 1921 | 1965 | 44 |
| | <i>north</i> | 2224 | 2233 | 9 |
| M5 | <i>work</i> | 2328 | 2410 | 82 |
| | <i>girl</i> | 2404 | 2467 | 63 |
| | <i>berth</i> | 2458 | 2560 | 102 |
| | <i>park</i> | 2436 | 2464 | 28 |
| | <i>bard</i> | 2356 | 2439 | 83 |
| | <i>cart</i> | 2426 | 2499 | 73 |
| | <i>north</i> | 2501 | 2623 | 122 |
| M6 | <i>cart</i> | 2193 | 2200 | 7 |
| W4 | <i>third</i> | 1758 | 1788 | 30 |
| | <i>cart</i> | 2236 | 2373 | 137 |

また、F3 の最大値から 20% の値を引いた数値を見ると、ダブリン方言話者の数値の方が、キラーニー方言話者の数値よりも、高くなっていることがわかる。キラーニー方言 (表 3) において、最大値 - 20% の最も高い値は 137Hz であるが、ダブリン方言 (表 2) では 12 語中 10 語が 137Hz を超えており、W2 の *third* や *bird* などの数値の高いものは、700Hz を超えている。つまり、ダブリン方言では、20% の F3 の数値が低く、その後上昇するが、キラーニー方言では、

20%の F3 の数値が高く、その後も高いまま推移し、結果的に僅かに上昇するか、僅かに下降していることがわかる。したがって、キラーニー方言では、母音と /r/ が融合しているのではなく、/r/ が脱落して、母音が終始発音されている語があると考えられる。

さらに、表 2 にまとめられている F3 が上昇する語に加えて、F3 が僅かに下降する語 (M4 の *birth* と *start*、M5 の *birth* と *start*、M6 の *start* と *park*、W4 の *work*) を見ると、/r/ の脱落が NURSE 語群と START 語群によく見られ、また、無声破裂音に前で起こり易いことがわかる。アイルランド英語諸方言一般に見られる特徴として、歯摩擦音 /θ/ と /ð/ はそれぞれ歯破裂音 [t] と [d] として実現される (Wells 1982: 429) が、これはキラーニー方言話者 4 名にも共通して見られる特徴である。歯破裂音 [t] で発音される *berth*、*birth*、*north* を無声破裂音の前に /r/ があるものとして考えると、/r/ が脱落していると考えられる 21 語中、「NURSE 語群」、「START 語群」、「無声破裂音の前」というどの条件にも当てはまらない語は、M4 の *square* のみであった。図 15 は M5 が発音した *work* のスペクトログラムである。周波数の範囲は 0 ~ 5000Hz に設定されている。F3 が終始高く、下がっていないことがわかる。

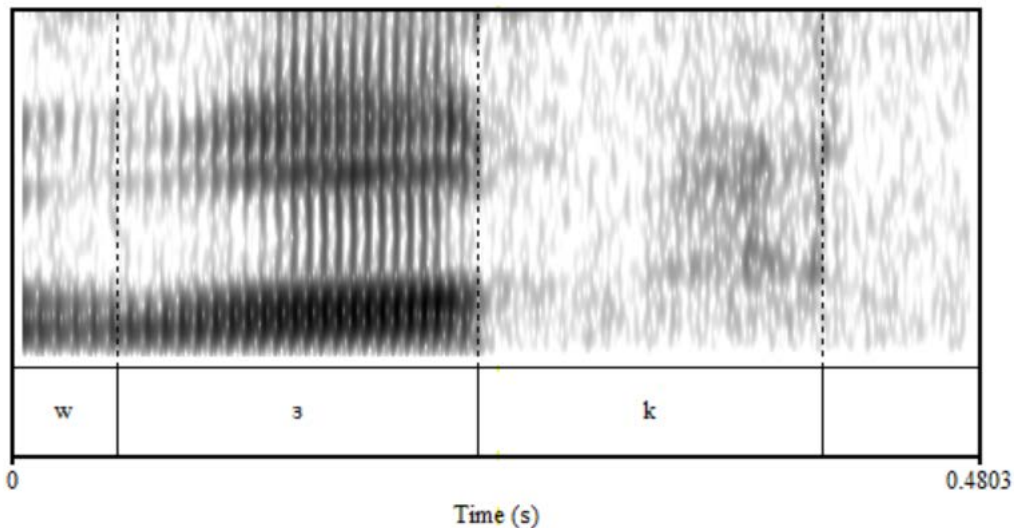


図 15 : *work* (NURSE 語群) のスペクトログラム (M5)

3.3 その他の方言

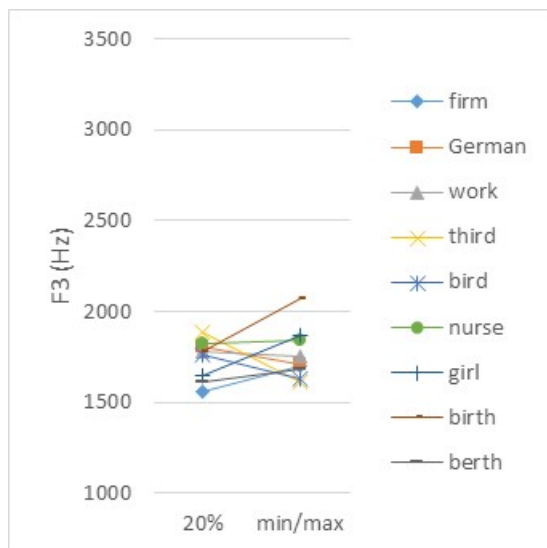


図 16 : NURSE 語群の F3 の推移 (M1)

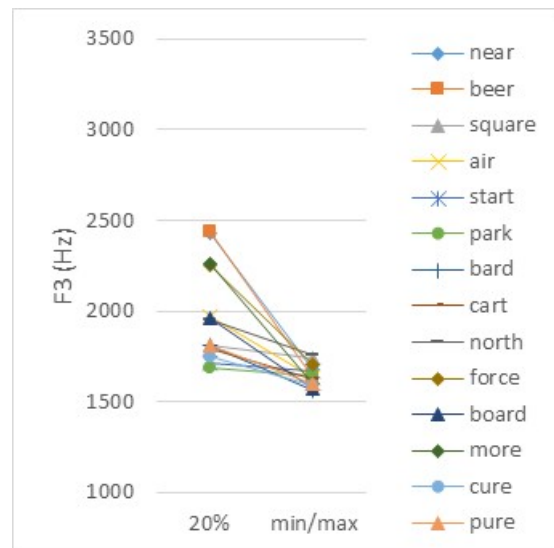


図 17 : その他の語群の F3 の推移 (M1)

図 16 と図 17 は、メイヨー方言話者 M1 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。NURSE 語群（図 16）の語は、F3 の値が終始低く推移していて、母音と /r/ が融合していることがわかる。一方で、その他の語群（図 17）の語はすべて、F3 の値が下降していることがわかる。しかし、その他の語群の中でも、START 語群の語（*start*: 1718Hz から 1668Hz、*park*: 1689Hz から 1641Hz、*bard*: 1814Hz から 1565Hz、*cart*: 1795Hz から 1630Hz）と CURE 語群の語（*cure*: 1747Hz から 1590Hz、*pure*: 1807Hz から 1598Hz）、そして *square*（1807Hz から 1737Hz）は、NURSE 語群の語と同様で F3 が終始低く推移しているため、母音と /r/ が融合していると考えられる。

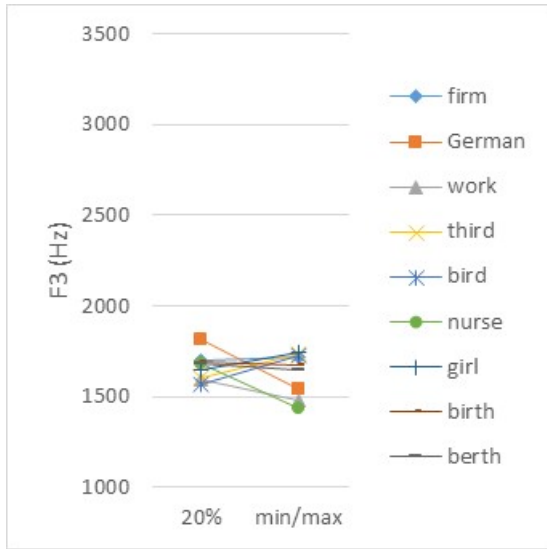


図 18 : NURSE 語群の F3 の推移 (M2)

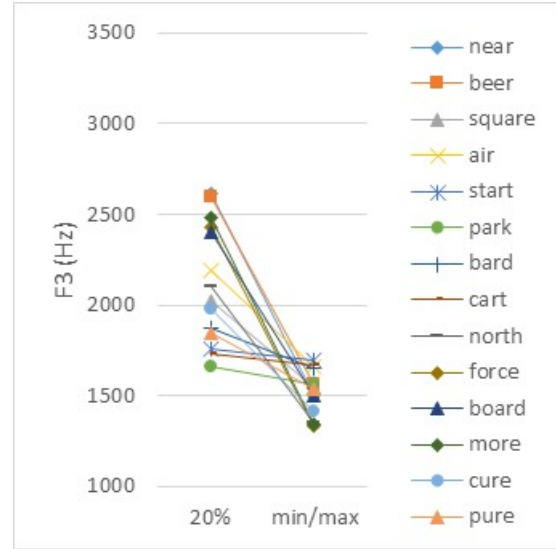


図 19 : その他の語群の F3 の推移 (M2)

図 18 と図 19 は、ヨーク方言話者 M2 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。M1（メイヨー：図 16）と同様で、NURSE 語群（図 18）の語の F3 は終始低く推移していて、母音と /r/ が融合していることがわかる。一方で、その他の語群（図 19）も M1（メイヨー：図 17）と同様で、すべての語の F3 の値が下降していることがわかる。しかし、START 語群の語（*start*: 1761Hz から 1699Hz、*park*: 1665Hz から 1563Hz、*bard*: 1872Hz から 1652Hz、*cart*: 1729Hz から 1668Hz）は、NURSE 語群の語と同様で、F3 の値が終始低く推移していて、母音と /r/ が融合していることがわかる。

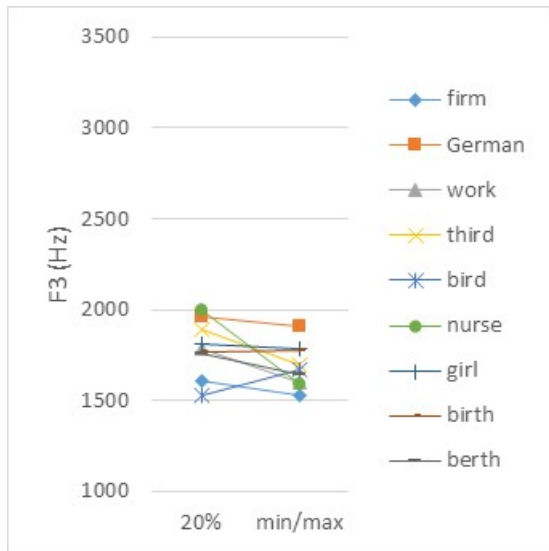


図 20 : NURSE 語群の F3 の推移 (M3)

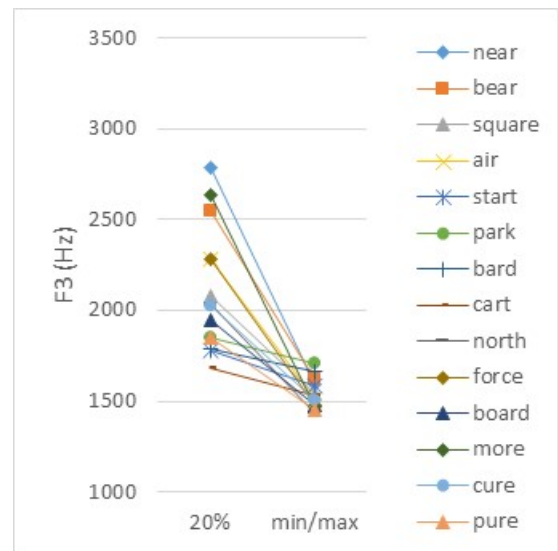


図 21 : その他の語群の F3 の推移 (M3)

図 20 と図 21 は、ウォーターフォード方言話者 M3 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。M1 (メイヨー : 図 16) と M2 (コーク : 図 18) と同様に、NURSE 語群 (図 20) の語の F3 は終始低くなっていて、母音と /r/ が融合している。その他の語群 (図 21) については、M2 (コーク : 図 19) と同様に、すべての語の F3 が下降しているが、START 語群の語 (*start*: 1779Hz から 1588Hz、*park*: 1849Hz から 1706Hz、*bard*: 1787Hz から 1661Hz、*cart*: 1678Hz から 1531Hz) に関しては、F3 の値が終始低く、母音と /r/ が融合していることがわかる。

図 22 と図 23 は、ティローン方言話者 W3 について、NURSE 語群とその他の語群における F3 の推移を示したものである。NURSE 語群 (図 22) に関しては、M1 (メイヨー : 図 16)、M2 (コーク : 図 18)、M3 (ウォーターフォード : 図 20) と同様に、F3 の値は終始低く、母音と /r/ が融合している。その他の語群 (図 23) については、SQUARE 語群 (*square*: 1974Hz から 1927Hz、*air*: 2071Hz と 2121Hz) と CURE 語群 (*cure*: 1986Hz から 2013Hz、*pure*: 1774Hz から 1853Hz) の F3 の値が終始低く推移していて、母音と /r/ が融合していると判断できる。

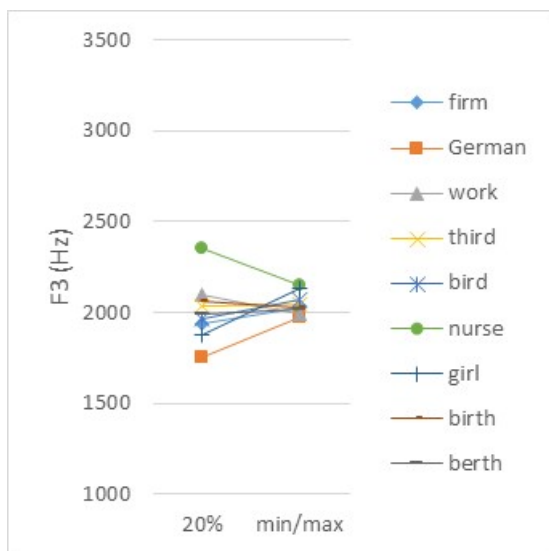


図 22 : NURSE 語群の F3 の推移 (W3)

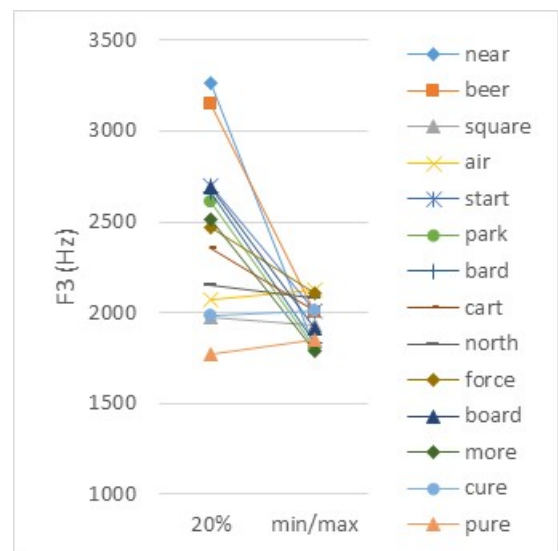


図 23 : その他の語群の F3 の推移 (W3)

その他の方言話者として扱った M1 (メイヨー)、M2 (コーク)、M3 (ウォーターフォード)、W3 (ティローン) の話者は、NURSE 語群の語の発音に関しては、ダブリン方言話者と同様の発音で一致しており、母音と /r/ を融合して発音していた。一方で、その他の語群の語に関しては、方言間で異なる発音が見られた。M1 (メイヨー) と M2 (コーク)、M3 (ウォーターフォード) は、NURSE 語群の語だけでなく、START 語群の語も母音と /r/ を融合させて発音していた。また、M1 (メイヨー) と W3 (ティローン) は CURE 語群の語と SQUARE 語群の語 (M1 は *square* のみ) も母音と /r/ を融合させて発音していた。図 24 は、M2 (コーク) が発音した START 語群の *bard* のスペクトログラムである。周波数の範囲は 0 ~ 5000Hz に設定されている。母音の始まりから F3 が低くなっていることがわかる。

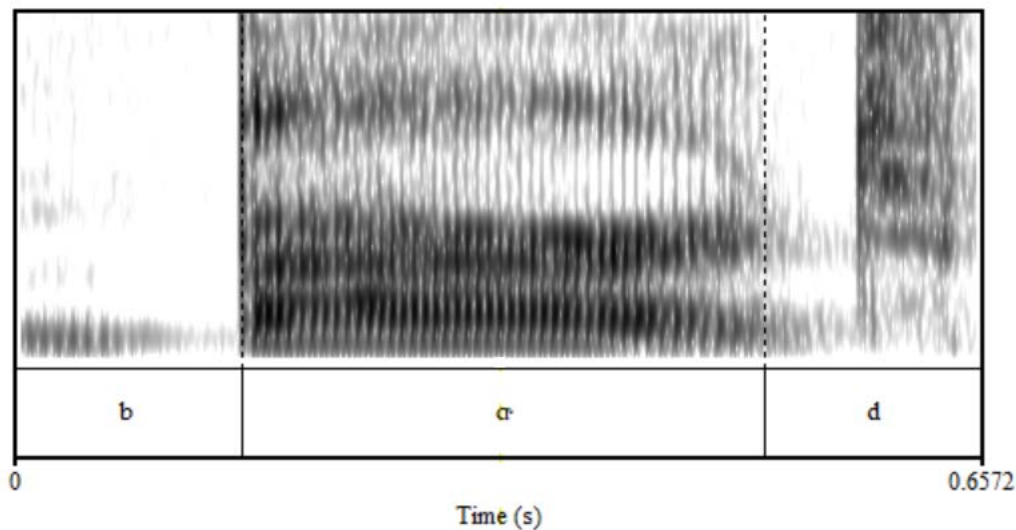


図 24 : *bard* (START 語群) のスペクトラム (M2)

4. 結論

本研究はアイルランド英語諸方言を対象とした分析を基に、母音と /r/ の融合状況が母音の種類や方言によって異なることを示した。ダブリン方言においては、NURSE 語群の語のみが終始 R 音化母音で発音されていて、その他の語群の語は母音と /r/ がそれぞれ発音されていた。一方キラーニー方言では、すべての語群の語で母音と /r/ の融合は生じていなかった。ただし、キラーニー方言話者は、NURSE 語群と START 語群の語や無声破裂音の前で /r/ を脱落させる傾向があった。その他の方言話者は 4 名すべてが NURSE 語群の語を R 音化母音で発音していた。さらに 4 名中 3 名の話者 (メイヨー : M1、コーク : M2、ウォーターフォード : M3) は START 語群の語を R 音化母音で発音していて、4 名中 2 名の話者 (メイヨー : M1、ティローン : W3) は CURE 語群と SQUARE 語群の語 (M1 は *square* のみ) を R 音化母音で発音していた。全体的な傾向として、NURSE 語群や START 語群といった、中舌寄りの母音が R 音化し易いことがわかった。

【参考文献】

Ashby, Patricia (2011) *Understanding phonetics*. London: Hodder Education.

Boersma, Paul and David Weenink (2015) Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.0.21, retrieved from <http://www.praat.org/>

Hickey, Raymond (1989) R-coloured vowels in Irish English. *Journal of the International Phonetic Association* 15: 44-58.

- Hickey, Raymond (1999) Dublin English: current changes and their motivation. In Paul Foulkes and Gerard Docherty (eds.), *Urban voices: accent studies in the British Isles*, 265-281. London: Arnold.
- Hickey, Raymond (2004) The phonology of Irish English. In Clive Upton (ed.), *Handbook of Varieties of English: the British Isles*, 47-76. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hickey, Raymond (2005) *Dublin English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hickey, Raymond (2012) Areal features of English in Ireland. In Raymond Hickey (ed.), *Areal features of the Anglophone world*, 79-107. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hughes, Arthur, Peter Trudgill and Dominic Watt (2005) *English accents and dialects*. 4th edition. London: Hodder Arnold.
- Labov, William (1966) *The social stratification of English in New York City*. Washington, DC: Center for Applied Linguistics.
- Ní Chasaide, Ailbhe (1999) Irish. In International Phonetic Association (ed.), *Handbook of the International Phonetic Association: a guide to the use of the International Phonetic Alphabet*, 111-116. Cambridge: Cambridge University Press.
- O’Rahilly, Thomas F. (1972) *Irish dialects: Past and present*. 2nd edition. Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies.
- Ó Sé, Diarmuid and Joe Sheils (2003) *Irish*. 2nd edition. London: Hodder Education.
- Thomas, Erik R. (2011) *Sociophonetics: an introduction*. Basingstoke: Macmillan.
- Wells, John C. (1982) *Accents of English* (3 vols). Cambridge: Cambridge University Press.

The distributional features of rhoticised vowels in Irish accents of English

Hiroshi MIURA[†] · Hironori KATSUDA^{††}

This study investigates features of rhoticised vowels in several Irish accents of English. It identifies the distribution of rhoticised vowels in each Irish accent. As the rhoticity lowers the frequencies of the third formant, the transition of the third formants in the rime (a vowel + /r/) duration is examined. This paper reveals that the vowels which are rhoticised vary from accent to accent. The NURSE vowel is rhoticised by the subjects from Dublin, Tyrone, Mayo, Cork, and Waterford, while the START vowel is rhoticised only by those from Mayo, Cork, and Waterford. Overall, central vowels, such as the NURSE and START vowels, are more likely to be rhoticised than other vowels.

[†]*School of Letters*

Senshu University

2-1-1 Higashimita, Tama-ku, Kawasaki 214-8580, Japan

E-mail: GLOSS1013@gmail.com

^{††}*Doctoral Program in Linguistics*

the University of California, Los Angeles (UCLA)

3125 Campbell Hall, Los Angeles, CA 90095, USA

E-mail: katsuda1123@gmail.com